

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第106集

にし がわ ら
西川原古墳

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター



口絵 遺跡遠景

西川原 1 号墳周辺の航空写真。南側から撮影している。写真中央部に写る丘陵の頂部が西川原 1 号墳の位置である。



この地図は国土地理院発行の
20万分の1地勢図「豊橋」「伊
良湖岬」「名古屋」を使用し
たものである

序

愛知県幡豆郡幡豆町は、三河湾に面した風光明媚な町として知られています。周知のように、町内には多くの文化財が知られており、古くから繁栄した場所でもあります。

このたび、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターでは、内陸地造成工事に伴う西川原1号墳の発掘調査を愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして、今回これらをまとめ、報告書として刊行致しました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め、関係諸機関及び関係者から多大なご指導とご協力をいただいております。深く感謝を申し上げます。次第であります。

平成14年3月4日

(財)愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

例 言

1. 本書は愛知県幡豆郡幡豆町に所在する西川原古墳（『愛知県遺跡地図』による遺跡番号は60018）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県企業庁が進めている内陸用地造成に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた、(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成11年10月～12月である。
4. 発掘調査は、木下 一（本センター主査、現西尾市立鶴城中学校教諭）・竹内 睦（本センター調査研究員、現主査）・池本正明（本センター調査研究員、現主任）が担当した。
5. 調査参加者は、以下の通りである。（五十音順・敬称略）
深谷和子・深谷春三・深谷 勉・深谷ひろみ・深谷みち系・深谷よし系
6. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財課（現生涯学習課文化財保護室）・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建設部・幡豆町教育委員会
7. 整理期間は、平成13年4・5月をあてた。
8. 遺物の整理・製図などについては、次の方々の協力を得た。
安部山孔子・鈴木智恵・妹尾美佐穂・真崎智恵子（五十音順・敬称略）
9. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。
天野暢保・荒井信貴・伊藤秋男・伊藤久美子・岩原 剛・上村安生・内田智久・小野田勝一・神谷友和・加納俊介・川崎みどり・北村和宏・斉藤繁雄・三田敦司・城ヶ谷和宏・檜崎彰一・賛 元洋・野本欽也・服部哲也・板野義広・板野俊哉・福岡猛志・福田啓志朗・松井直樹・三宅唯美・山本直人・山本村夫・渡辺博人（五十音順・敬称略）
10. 本書で使用する色調名は1989年度版『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。
11. 調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。海拔標高はT.P.（東京湾平均海面標高）による。
12. 本書の編集は池本正明が担当した。執筆は池本のほかに、第Ⅰ章2を竹内が、付編は平尾良光氏・鈴木浩子氏（独立行政法人東京国立文化財研究所）の手による。
13. 調査に関する実測図・写真などの資料はすべて本センターが保管している。
14. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
1 調査の経緯・経過	1
2 歴史的環境	2
第Ⅱ章 遺 構	6
1 立地	6
2 墳丘	6
3 石室	6
第Ⅲ章 遺 物	12
1 土器	12
2 金属製品	14
(1) 銅製品	14
(2) 鉄製品	15
3 石棺	15
第Ⅳ章 考 察	17
1 西川原1号墳関連遺物	17
2 被葬者のイメージ	18
第Ⅴ章 まとめ	23
付 編	
愛知県西川原1号墳から出土した帯金具の自然科学的研究	26
付 表	
遺構計測一覧	34
遺物計測一覧	34



挿図目次

図1	SX01	1
図2	周辺の遺跡	5
図3	調査地点	7
図4	調査区全体図	9
図5	石室	11
図6	土器	12
図7	金属製品	13
図8	石棺	16
図9	伝西川原1号墳出土遺物実測図	17
図10	西川原1号墳位置図	19
図11	石室の比較	21

図版目次

図版1	石室	36
図版2	奥壁	37
図版3	奥壁、側壁	38
図版4	土器	39
図版5	金属製品	40

付編 挿図・表目次

図1	西川原1号墳から出土した帯金具の蛍光X線スペクトル	30
図2	西川原1号墳から出土した帯金具の蛍光X線スペクトル	31
図3	西川原1号墳から出土した帯金具の鉛同位体比	32
図4	朝鮮半島産鉛鉱石の鉛同位体比	33
表1	愛知県西川原1号墳から出土した帯金具の鉛同位体比	29

口絵 遺跡遠景



第Ⅰ章 はじめに

1 調査の経緯・経過

愛知県企業庁では、幡豆町内に内陸用地造成を計画した。しかし、この予定用地には周知の遺跡として西川原古墳が所在していた。このため、事前に愛知県企業庁と愛知県教育委員会とが、その取り扱いを巡って協議した。その結果、この遺跡を発掘調査し、記録保存する方向でまとめられた。そして、愛知県企業庁より愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査は、平成11年度の下半期に実施した。総面積は500㎡である。

調査理由

なお、本墳の調査に先立って、開発予定地内の分布調査が実施された。その結果、新たに古墳が1基確認され、西川原2号墳と命名された。なお、この段階で西川原古墳は、西川原1号墳と呼ばれることとなった。

西川原1号墳

調査方法は、調査予定地とは排土置き場予定地を伐採した後、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで表土を掘削して遺構を検出する方法をとった。

調査区の調査直前までの様子は、奥壁と予想される立石が地表面に露出していた。そして、地権者の縁者がこれに新たな立石を追加し、周囲には石棺の破片と、側壁の使用石材と考えられる板状の石を周囲に敷き詰め、祭壇状を呈していた（以下、SX01と呼称）。発掘調査は、SX01が古墳の石室を改変した構築物と予想し、ここから後世の改変部分を取り除く作業から開始した。その結果、SX01は全て後世の造作であることが判明した。中央が奥壁で、左右が立柱石の石材を転用した可能性が強い。なお、この作業中に設定したトレンチの下部から、本来の石室も確認している。調査は、石室の全容を検出後、墳丘の確認作業を実施した。

遺構測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50基本平面図を作成したほか、石室については補助測量図を手測りにより作製した。



図1 SX01

2 歴史的環境

西尾市東北部から吉良町、幡豆町に到る矢作川下流域の東部地域には、200基程度の大小古墳が存在している。かつてこの地域と三河湾の一部を治めた首長墓と考えられる古墳も少なくない。この地域の古墳の変遷を概観し、西川原1号墳の被葬者像を探っていきいたい。

前期

現在までの知見では、西三河最古の古墳と言われるのは、吉良町北部の八幡山古墳である(大橋他 1996)。全長66mを測り、前方部が後円部に対し、低平で幅の狭い形態であることから4世紀半ばに築造されたと考えられる。吉良町岡山丘陵で最も高い八幡山山頂(58.6m)に築かれ、周辺のあらゆる場所を見渡せるところに立地している。八幡山古墳に葬られている被葬者がかなり広い範囲を支配していたことが伺える。

吉良町北部では弥生時代から古墳時代に移行する時期に急激に遺跡数が増加している。この時期に相当する周辺の遺跡には、八幡山遺跡・中根山遺跡・砦山遺跡などの岡山丘陵上の遺跡、沖積低地には岡山南遺跡・渡船場遺跡・山崎遺跡などの集落遺跡が挙げられる。八幡山古墳北方の西尾市東部地域には、西三河を代表する弥生時代の集落遺跡である岡島遺跡や毘沙門遺跡が存在している。どちらも弥生時代末期には姿を消しているが、岡島遺跡の西方1.5kmには古墳時代まで存続していたハツ面山西南麓遺跡群がある。遺跡分布に基づけば、当時、西尾市以南は大きく海が入り込んでおり、矢作川の河口はハツ面山南麓周辺部と考えられる。このような分布状況から、八幡山古墳の被葬者の支配下はハツ面山から吉良町岡山に到る海岸部まで達していたと考えられる。

中期

次の時期に位置づけられるのは、国指定史跡の正法寺古墳である。全長90m以上を測り、豊川市の舟山1号墳と並ぶ三河地方最大級の規模となる。築造年代は墳形、埴輪の特徴から5世紀前葉に編年される。八幡山古墳よりもかなり海に近い吉良町大字乙川の丘陵の先端に築かれ、主軸方向には、佐久島・日間賀島・篠島が見える。正法寺古墳の被葬者は、八幡山古墳の被葬者の支配地域に加えて、三河湾さらには伊勢湾に通じる交通路を押さえるほどの強大な勢力をもった被葬者と考えられる。正法寺古墳とほぼ同時期に築造されたと考えられるのが経塚古墳である。経塚古墳も吉良町大字乙川に所在し、直径30m、高さ3mの円墳で、正法寺古墳と同じ特徴を有する埴輪が出土している。

次に続く5世紀前半の古墳は、吉良町～西尾市東部地域に見られるが、大きな前方後円墳は姿を消し、最大でも直径20m前後の規模を有する円墳となる。

吉良町南部地域には、経塚古墳より北方2kmの丘陵地に岩場古墳(池上 1957)がある。全長27mの帆立貝式古墳であるが、「埴輪棺」の出土で全国的に有名である。出土遺物・埴輪の特徴から5世紀中葉に編年される。経塚古墳(大字乙川)は滅失していて、墳形、内部構造とも不明であるが、須恵器の平瓶、埴輪と思われる口部が出土していることから5世紀後半代から6世紀に位置づけられる(北村 1989)。ほぼ同じ時期、初期横穴式石室をもつ中之郷古墳(土生田 1988)が築造されている。幡豆町大字西幡豆の小野ヶ谷川と八幡川に挟まれた北から南に延びる丘陵の最南端、標高10m前後に位置する。墳丘は削られて

本来の規模は不明であるが、円墳と推定される。羨道は失われているものの玄室の大部分はよく旧状を保っている。出土遺物に年代を特定できるものはないが、石室構造から見て、5世紀後半の築造と考えられる。石室は、長方形の玄室に比較的短い羨道が両袖式に取りつく形式で、各壁面はいずれも小石材を横方向に平積みして構築している。佐賀県東松浦郡浜玉町横田下古墳に系譜の源流を求めることができ、北部九州からの文化伝播の可能性を強く示している。

吉良町北部地域の5世紀前半代の古墳には、大字岡山の寄名山第1号墳、若宮第1号墳がある。寄名山第1号墳は、円筒埴輪・形象埴輪及び須恵器片が採集されている。墳形や規模は不明であるが、立地条件からして被葬者の支配下は西尾市東部地域まで達していたと考えられる。若宮第1号墳では、四獣形鏡が出土している。小形の仿製鏡であるが、副葬品の内容や立地から見て、被葬者は吉良町北部から西尾市にかけての地域を支配していたと考えられる。

西尾市東部地域の5世紀前半代の古墳には、五砂山古墳が挙げられる。古墳は浅井山丘陵の南端、五砂山山頂（標高44m）に位置し、自然地形を利用して築かれている。出土遺物は鉄製品で占められており、特に鉈は西三河の古墳ではほとんど出土していない。五砂山古墳築造後、半世紀以上にわたり同地域では古墳の築造は見られない。この地域で五砂山古墳の次にくる古墳は、西山古墳である。西山古墳は、五砂山古墳と同じく浅井山丘陵に立地する径推定23mの円墳である。外部施設に葺石と埴輪が並べられ、特に形象埴輪の種類は多い。墳丘上から出土したものに、坏蓋、無蓋高坏の坏部、埴の胴部などの須恵器片があり、その形式から5世紀末～6世紀初めの築造と考えられる。

6～7世紀にかけての時期に編年される古墳は多く、数基の古墳がまとまりを持って分布している。しかし、西三河では、「丘陵の尾根上または斜面の比較的広い範囲に散在的に分布する場合が大半で、西尾市羽角山古墳群のように90基以上の古墳からなる大型古墳群は例外的（三田 2000）」で、多くても10基ほどが集まる程度である。吉良町、幡豆町の古墳は2、3基程度の古墳がまとまりながら町内各所に点在しているが、佐久島古墳群、日間賀島古墳群などは一支丘に10基を超える古墳が近接して造られている。

後期

西尾市の羽角山古墳群（松井 1999）は、標高118.5mの羽角山から標高160.6mの万燈山までの直線距離にして2.5kmの間に起伏する丘陵尾根に点在する90余基の古墳を総称している。6世紀中葉から7世紀後葉まで継続して築造され、地形と群集の状況から12支群に区分している。墳丘規模は概して小規模で、大部分は径10m前後の円墳である。西三河を代表する古墳群であるが、全般に墳丘規模が等質的で、副葬品の内容は貧弱である（岩原 2000）。その中でも、6世紀中葉に築かれた住崎1号墳は、群集墳内では最も大きな石室を備えており、古墳群中で唯一馬具を出土している。かなり広い地域を支配していた被葬者と考えられる。また、やや遅れて7世紀中葉に編年される三ノ山古墳も大規模な古墳で、新たな地点に独立して築造されているのが特徴である。この時期に出現する他の古墳とは石室構造から見て異質であり、有力な被葬者と考えられる。

ここで、この地域の被葬者の支配が及んだ範囲について、日間賀島古墳群（杉崎 1979）（口絵裏参照）を紹介しておきたい。日間賀島は現在、尾張地方知多郡南知多町に属しているが、一色町佐久島はもとより、奈良時代には南の篠島とともに三河国幡豆郡に属している。佐久島・日間賀島にはそれぞれ30基以上の古墳が見られ、地質的にも両島は似通っている。南の篠島が全島、花崗片麻岩からできているのに対し、佐久島・日間賀島は第3紀中新統の水成岩からできている。両島から産出する凝灰質砂岩は堅くしまっており、石室の材料として両島以外にも利用されている。14基からなる北地古墳群は、5500㎡の広さに密集しており、北地11号墳から出土した長頸壺は東海地方とは異なった特色を持った須恵器で、三河湾の一部を治めた被葬者の交易の広さを示している。

西川原1号墳の所在する幡豆町には前期古墳は確認されていない。後期になり、古墳が多く造営されるようになる。東幡豆の平野を囲む丘陵地には、多くの後期古墳が築かれている。その多くは、洲崎山古墳群（愛知県 1971）のように出土遺物も貧しく、墳丘や石室の規模も小さいが、被葬者は古墳を築き得るだけの一定の経済力と社会的地位を備えた有力者であることには違いない。最も古い洲崎山1号墳（6世紀前半）の横穴式石室が堅穴系横口式石室と呼ばれる北部九州系の石室であることから、狭い谷間の沖積地での農耕に従事しつつ、海に依存した経済活動も行っていたものと考えられる（大橋他 1996）。

6世紀半ばの築造と考えられるとうてい山古墳（池上 1967）は、出土遺物や石室構造の特異性から見ても有力な被葬者と考えられる。地元で「とうてい山」と呼ばれる三ヶ根山から南へ舌状にのびる標高50mの丘陵の先端に立地している。開墾により改変が著しく、墳形、規模は不明である。また、2回にわたる発掘により、出土遺物の多くは持ち去られてしまっているが、最初の発掘時の写真が幡豆町歴史民俗資料館にあり、ほぼ全容を知ることができる。それによると、豊富な須恵器を始め、武器・馬具・装身具類が大量に出土している。また、西三河でもいちやく袖構造をもつ長方形型の石室を採用する古墳で、石棺は佐久島の砂岩を使った組み合わせ式箱式石棺である。これは、とうてい山古墳の首長の支配範囲を示すものであり、注目される。この他に幡豆町に組み合わせ式箱式石棺を有する古墳は、下山古墳（北村 1989）、講伏古墳（加藤 1986）、谷村三ツ塚1号墳、山崎古墳、そして本報告書の西川原1号墳がある（森 1997）。

とうてい山古墳に次いで有力者の古墳としては、6世紀後半の円頭柄頭を出土した中ノ浜古墳、7世紀後葉の径19mの円墳である根ノ上古墳（加藤他 1986）が挙げられる（三田 2000）。これらの古墳は、群集せず、小平野の周囲を移動するように築かれており、洲崎山古墳群や越山古墳群などの小型古墳と混在して分布するのが特徴である。とうてい山古墳を出土遺物や立地、それに続く幡豆町内の古墳を総合的にとらえてみると、この地域の支配者が吉良の地から幡豆の地に移動したと考えても無理のないことであろう。

以上、西川原1号墳をとりまく歴史的環境ということで、周辺の地域を治めた有力者の古墳と思われるものを中心に概観した。西川原1号墳の造営、被葬者像についての考究は、この地域における古墳の変遷とのかかわりの中で理解される必要があろう。

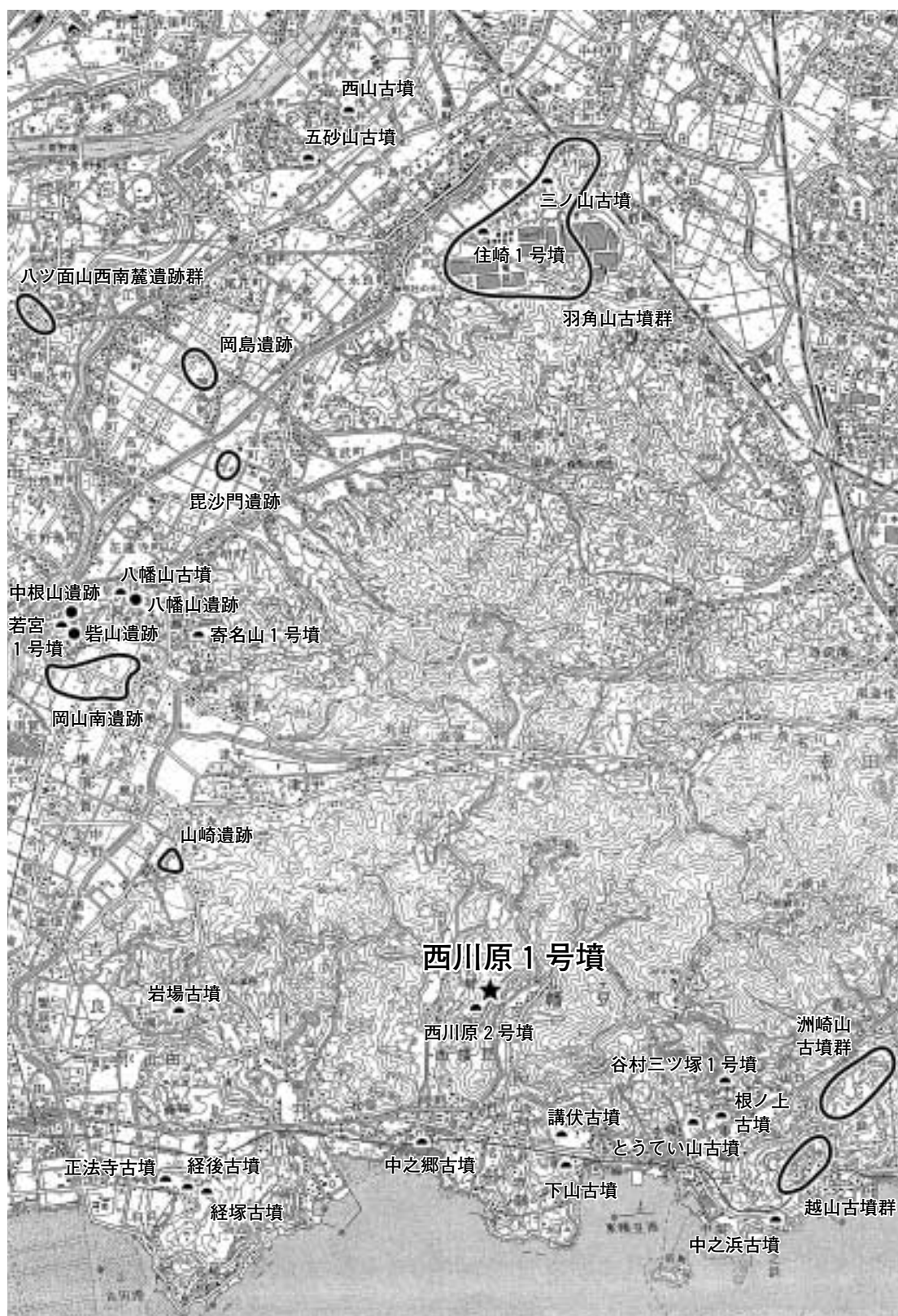


図2 周辺の遺跡（1：50000）

この地図は国土地理院発行1：50,000地形図「岡崎」「蒲郡」を使用したものである。

第Ⅱ章 遺 構

本墳は、ほぼ南方向に開口する横穴式石室を内部主体とする。

大正の発掘

本墳は大正 5 ～ 6 年頃に、遺物の採集を目的として地元有志らにより発掘されたと言う。参加者の子孫が伝え聞く所では、この段階で石室の石材も大半が持ち出され、耕作地の石積みなどに再利用された様である。SX01は、発掘後に設置された祭壇で、中央の立石は奥壁使用の石材を、両側の立石は周辺に露出していた石材を再利用したものと言う。

ここでは、遺構について立地、墳丘、石室構造の順に報告する。

1 立地

本墳は、「お寺山(1)」の頂部から南に 5 m に進んだ地点に奥壁が設定されている。この独立丘陵は、海岸に向けて舌状にのびる丘陵で、本墳の位置する地点をその頂部としている。東西は小野ケ谷川と八幡川があり、両河川は海岸部で小規模な平野を形成している。これが、現在の西幡豆と呼称されるエリアの中核となっている。

盛土

本墳の石室開口部からは、小野ケ谷の集落と、これを貫通する小野ケ谷川を眼下とし、半島状に短く突き出した寺部の山塊を背景に三河湾を一望できる状況にあった。

2 墳丘

墳丘については、石室の右壁付近で、若干の盛り土を確認できたにすぎない。自然流失や開墾などが原因しているものと考えられる。このため、調査では、墳丘の形状や盛土の規模、周溝や列石の有無など、墳丘に関する手がかりをほとんど得ることはできなかった。

ただし、後述するように、奥壁が一石構造と仮定して試算した天井高、1.46m が正しいのであれば、少なくとも奥壁付近では、堀形の上端程度まで石室の構造材が到達し、(推定天井高(後述)＋天井石厚み)。従って、小規模な土盛りも存在していたこととなる。

3 石室

本墳は、ほぼ南方向に開口する横穴式石室を内部主体とする。主軸は、N-172°-Sである。残存状況は良好とはいえず、かろうじてその平面形をとどめるにすぎない。また、急峻な独立丘陵の頂部に立地する関係で、前面が流失している可能性も考えられる。石室の埋土も、前回の発掘によりほぼ完全に掻き出され、床面直上まで腐植土土が観察できる状況にあった。なお、石材は残存するものについては全て結晶片岩が使用されている。

以下、石室の部位毎に報告を加える。

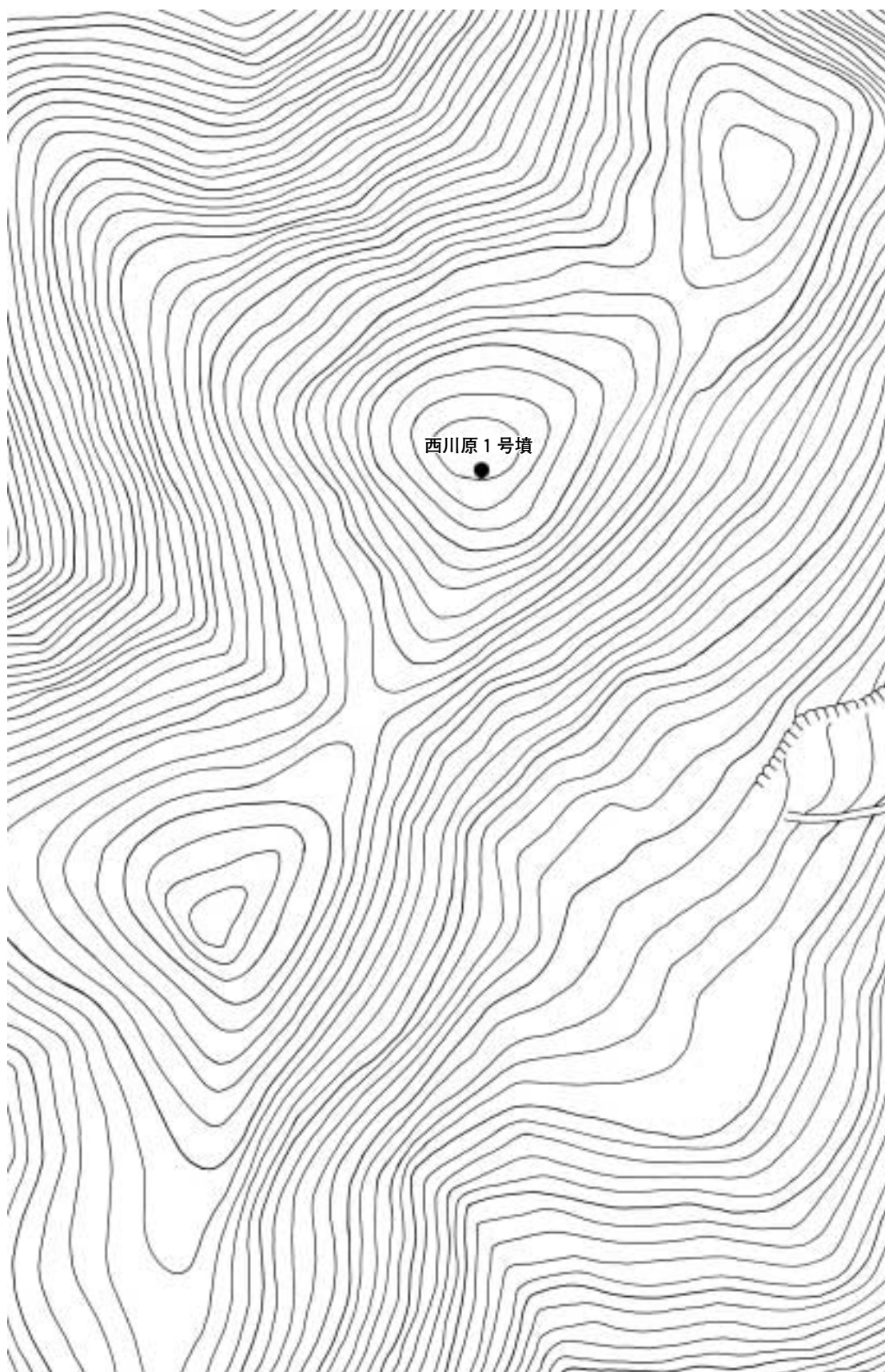


图3 調査地点（1：1000）

奥壁

奥壁は石材を抜き取られ、欠損している。幅は0.76mをはかる。この部分に長径0.76m、**推定天井高**短径0.52m、深さ0.12mの楕円形土坑を掘削し、奥壁の立石の基底部を据えた後、若干の拳大礫でこれを固定する構造となる。なお、土坑の規模は、SX01に使用されていた中央の立石を縦長に設置した場合と、ほぼ一致している。この場合、土坑底面から立石の頂部までの高さは1.46mとなる。奥壁が一石構造であるのであれば、この値はほぼ天井高を示していると考えられる。

側壁

側壁は、扁平な割石を積んで構築している。石材は、奥壁の設定後に奥壁側から順次設置されていたことが観察できる。ただし、残存状態は悪く、右壁奥壁（堀形上端）から1m付近でのみ、最下段から三段目までが確認できるにすぎない。この部分の最高残存値は0.42mをはかる。一方、左壁では、最下段の石材が奥壁から連続して1.6mまでは残存するが、これより先にも基底部と考えられる石材が若干残存し、かろうじてその平面形状を想定することができる。

なお、SX01の両端に使用されている石材は、本墳の所在地よりやや下方、丘陵の南側斜面より運ばれたものだという⁽²⁾。これらは、形状から立柱石として使用されていた石材である可能性を持つ。なお、立柱石として使用した場合、掘形を計算しなければ、高さは片方が1.4m、もう片方が1.0mとなる。

立柱石

床面

石室の平面形は、基底部の石材全てが残存しているわけではないので、明確にはできない。規模は、奥壁（堀方上端）より2.2m地点で、残存部分の最大幅1.77mをはかる。床面は岩盤を掘りくぼめたもので、レベルは奥壁側がわずかに高い。明瞭な敷石は認められないが、わずかに奥壁より4.32m地点で、拳大～人頭大程度の結晶片岩の割石が確認できる。割石は平坦面を上に向けてそろえてあり、外側の2点を除き、上面のレベルがほぼ一致する。

こうした状況から、ここで石室構造を想定してみると、次の二案に可能性がある。

石室構造案

第1案は、細長胴張り形の石室⁽³⁾を考える。前面の石を玄室の敷石と、羨道部に置かれた閉塞石と分けて理解し、この両側に立柱石が建つ構造を考える。割石群は、頂部のレベル差を根拠に、外側の2点が閉塞石、残りを敷石の一部と理解したい。第1案では玄室長は推定4.7m。玄門の幅は推定1.2mとなる。さらに短い羨道部分が付くはずであるが、これは流失しているものと解釈する。



図4 調査区全体図 (1 : 100)

第2案は、右壁の奥壁から 3.2m地点に存在する浅い土坑状の浅い窪みを、立柱石の堀方と考え、奥窄まり形の石室と考える。この場合、玄室の全長は 3.06m、玄門の幅は、1.63mとなる。この場合、前面の割石群の理解がやや困難で、外側の2点を閉塞石とし、残りを羨道部の敷石と考えるか、すべてを閉塞石と理解することになる。敷石群を前者の考え方で解釈すると、長さは推定 1.6mとなる。しかし、羨道部には敷石が存在する事例が乏しく、若干の問題点となる。また、後者の考えでは、割石上面のレベルが、外側の2点を除き、ほぼ平坦となる状況が説明しにくくなる。

天井

天井は完全に消滅している。ただし、天井石と考えられる石材が、3点確認できた。いずれも結晶片岩である。一つは、石室前方1mに位置するもので、長辺 1.1m、短辺 0.8m、厚さ 0.3m。もう一つは、石室から40m程度下方にまで運び出され放棄されたと伝承されているもので、長辺 1.2m、短辺 0.8m、厚さ 0.2mをはかる。もう一つ、まぐさ石と推定される石材がある。これは、本墳出土の伝承を持つ石材で、前回の調査時に採集され、幡豆郡吉良町の祐正寺に保管されていたもので、長辺 1.4m、短辺 0.4m、厚さ 0.07mとなる。これは石室構造を第1案とした時の玄門幅と整合するサイズである。

石室掘形

本墳は、結晶片岩の岩塊を開削し、長辺 6.5m、短辺 3.3mの石室掘形を造成している。石室開口部から斜面に平坦面を開削したため、奥壁部分では、1.68mの高さを持つ。壁面の傾斜角は、左壁が、62°で 0.3m程度立ち上がった後、84°とほぼ垂直をはかる。右壁は、62°で湾曲気味に立ち上がる。また、奥壁は、基底部から 0.7m程度までは、85°とほぼ垂直に立ち上がった後、48°と緩やかな傾斜となる。いずれも奥壁や天井石の設置時に、労力を軽減するための工法上の理由によるものであろうか。また、基盤層を大きく掘り込んで石室を設定する工法は、墳丘構築時の盛土量を軽減する目的も含まれていたのかもしれない。

なお、掘形と石材の位置関係は、確認できる部分では、石材を設置するのに最低限必要な規模を持つにすぎない。また、左壁の奥壁（掘形上端）より計測して1.46mから2.42mまでは、床面上に側壁石材を設置するための段状の構造も確認できる。この部分の高さは 2cmをはかる。掘方の掘削作業は、石室構築作業の全工程を見据えた合理的なものであったことが考えられる。

注

(1) 地元で用いられる通称的な地名で（図10）も含めて、幡豆町歴史民俗資料館前館長 福田敬史郎氏の

- 御教示による。
- (2) やはり福田敬史郎氏の御教示による。
- (3) 石室は、森 泰通氏による分類（森 1999）に従った。

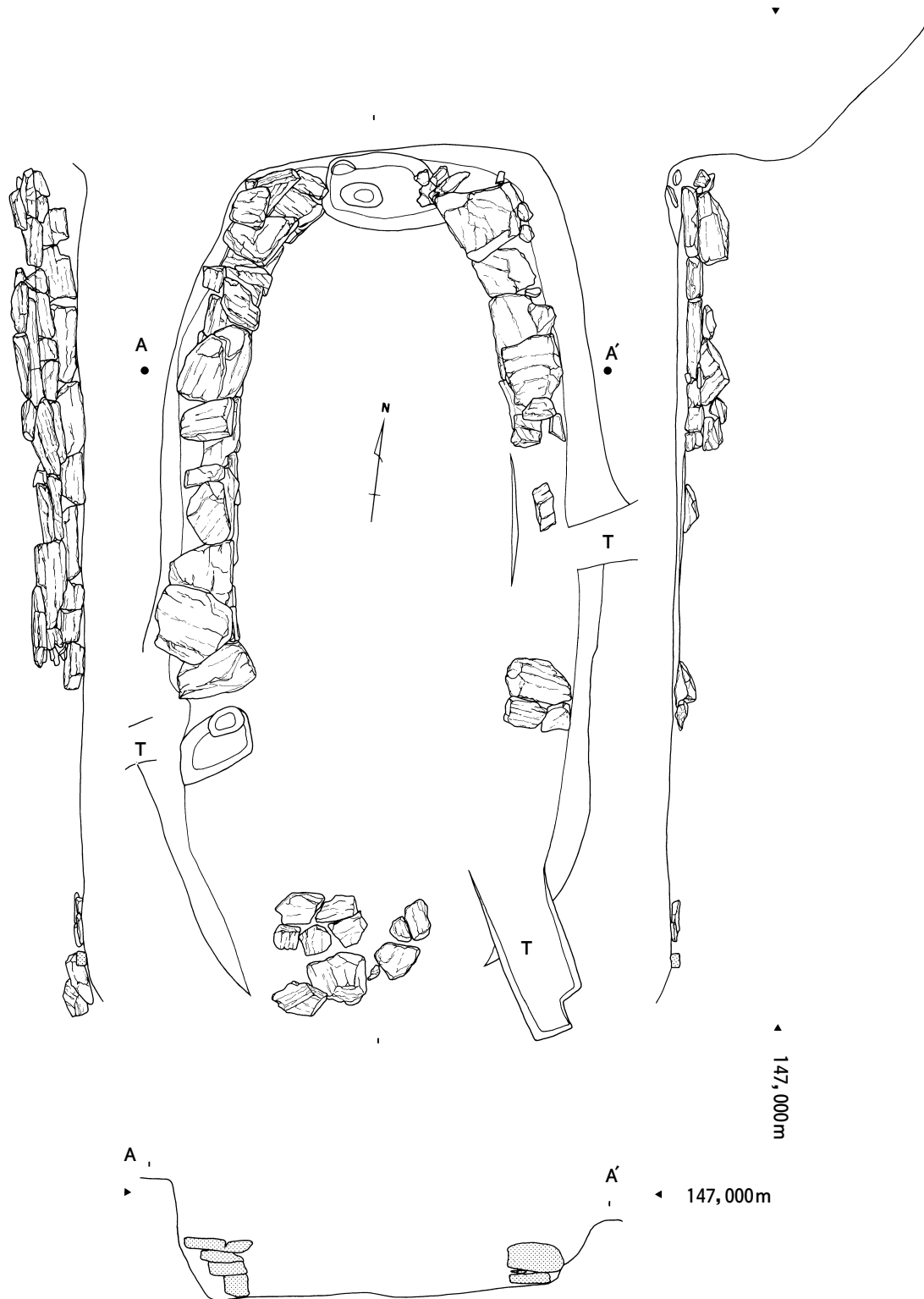


図5 石室（1：40）

第Ⅲ章 遺物

今回の調査で得られた資料は、乏しい。種類には、土器・陶器類と、金属製品がある。出土位置は全て石室外で、全点が、前回の発掘時に発生した排土中から採集されており、オリジナルな位置を留めてはいない。

1 土器⁽¹⁾

土器には、土師器と須恵器がある。

須恵器

1～3は、須恵器。

1・2は杯G。1は蓋。鈕を欠く口縁部片。口径は、9.8cmをはかる。返り部が短く屈曲し、口縁部よりわずかに突出する形状。図示したもの他に、接合はしないが、同一個体と考えられる破片2点がある。2は杯Gの身としたが、高杯の杯部の可能性も考えられる。腰部以下を欠く口縁部片で、口径は、9.1cm。ほぼ直線的に口縁部に至る。

3は高杯。器壁は厚い。裾部片と、口縁部片を各1点確認したが、類似点が多く、同一個体と理解した。口縁部は、浅い。口径13.6cm、底径10.7cmをはかる。形状は、端部で短く外反し、上面はほぼフラットとなる。裾部は、緩やかに外反する。端部でラフな縁帯を形成する。

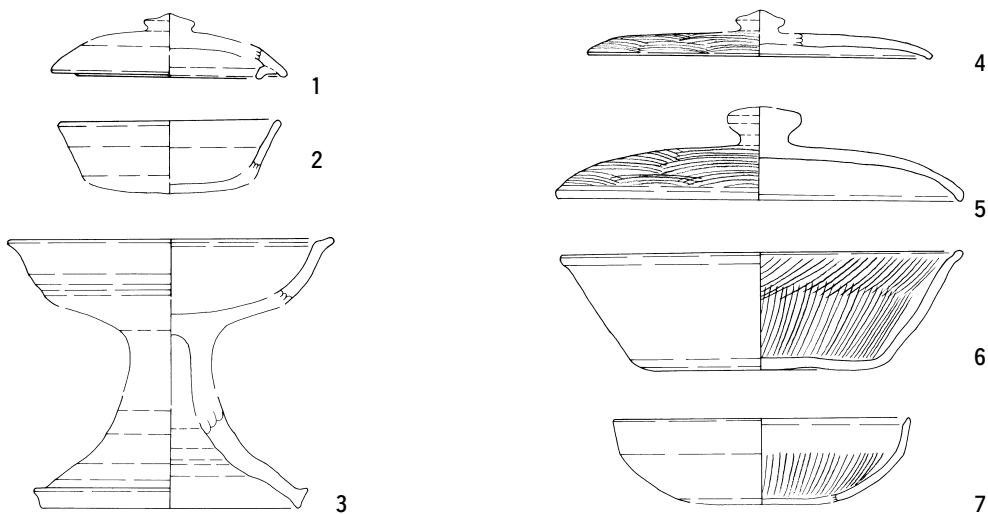


図6 土器（1：3）

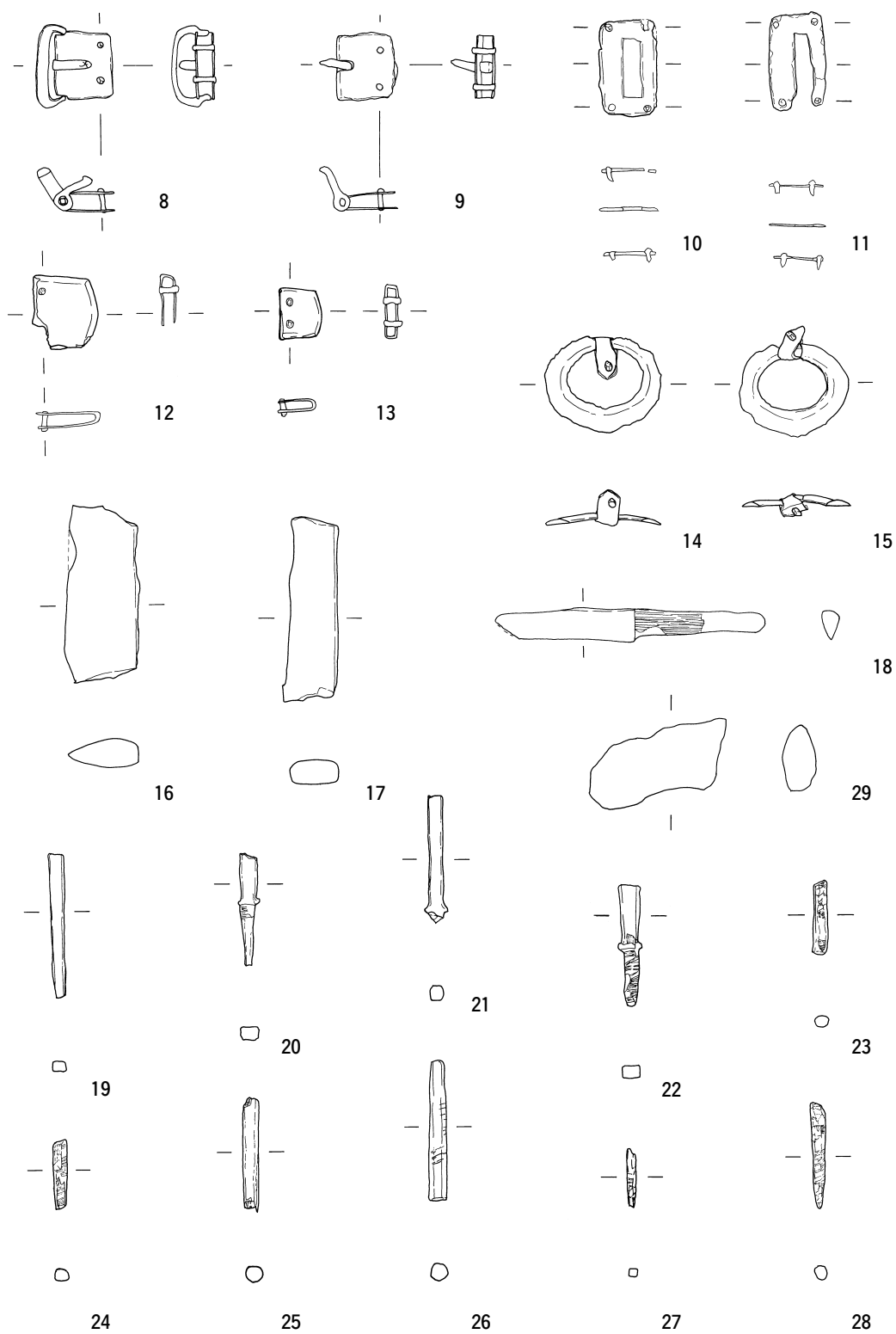


图7 金属製品 (1 : 2)

土師器

4～7は土師器。いずれも、いわゆる畿内産（系）土師器である。

4・5は蓋。4は鈕を欠く。口径は、14.4cmをはかる。扁平な形状で、口縁部は玉縁状を呈する。天井部上面の中央に4回一周のヘラミガキ、外側にはさらに細かい単位のそれを施す。

5は杯Bの蓋か。口径は、17.2cmをはかる。鈕は高く大振りとなる。天井部はほぼ平坦で口縁部付近で丸味を持つ。端部は若干肥厚し、丸い。上面には浅い沈線文も確認できる。天井部上面の中央に4回一周のヘラミガキ、外側にはさらに細かい単位のそれを施す。

6は杯A。口径は16.8cm、底径9.1cmをはかる。形状は、腰部の屈曲が強く、口縁部が外反する。端部は玉縁状を呈する。内面底部にラセン状暗文、体部内面には二段の放射状暗文を施す。外面は風化が進み、詳細は不明だが、底部に木葉痕が確認できる。

7は杯C。口径は、12.4cmをはかる。形状は、体部は丸く、口縁部付近で直立する。口縁部は緩やかに内湾し、内面には幅広の内傾面を持つ。内面は放射状暗文を施す。

2 金属製品

金属製品には、金銅製品と鉄製品がある。

(1) 銅製品

銅製品には、帯金具と、これに関連すると考えられる環状銅製品2点がある。なお、この他に、形状が判明しない銅板片が5点採集されているが、図示してはいない。

帯金具 鉸具

鉸具は、2点採集されている。いずれも同一規格で、8はほぼ全形を留め、9は縁金を欠く。厚さ1mmの銅板を側面から見てU字状に折り曲げ、縦22mm、横20mmのほぼ正方形としたもので、帯は端部をその間に挿入し、鉚でこれを留める。銅板の屈曲部には、横棒を置き、これに縁金と刺金を取り付ける構造をとる。刺金は基部側が環状で、縁金側はわずかに鳶口状となる。

鈔板

鈔板は、2点採集されている。いずれも、ほぼ同一規格の長方形銅板で、四隅を鉚で留めて帯に着装する構造。長辺を縦方向に着装するものと仮定して図示した。中央よりやや片側に依った位置に、長辺20mm、短辺6mmの長方形の切り抜きが施される。裏面には、着装時の痕跡は確認できない。垂飾の有無は不明である。ただし、11は図示した下側の短辺が欠落しており、垂飾と結束されたものが離れる時に負荷が掛った結果である可能性も残す。

鉈尾

鉈尾は、2点採集されている。いずれも、厚さ1mmの銅板を袋状に曲げて製作されている。側面はD字状を呈する。帯への着装は、帯の端部にこれを被せた後、鉈で留める構造となる。12は、着装部分の幅が、17mm 残存する。図示した下部は欠損するが、復元される推定値は25mm である。この部分は、断面が長方形となり、短辺は6mm となる。13は、着装部分の幅が、13mm である。この部分は、断面が長方形となり、短辺が4.5mm となる。鉈の間隔は8mm となる。

環状銅製品

環状銅製品は、2点採集されている。銚板に垂飾された佩用品を取り付ける金具か。いずれも卵形の環状で、断面形は潰れた半円形を呈する。14は、長径4.0cm、短径3.4cm、15は、長径3.7cm、短径3.4cm をはかる。いずれも長径側の一辺に幅7.0mm、厚さ0.5mm の銅板を巻き付けて、鉈でこれを留める。円環と銅板との結束位置は、円環側がやや細くなり、位置を固定する構造となる。

(2) 鉄製品

鉄製品では、鉄鏃と鉄刀、刀子が確認できた。

鉄鏃

鉄鏃は、11点確認できた。全て鏃身を欠くもので、頸部ないし茎部の破片である。このうち、21～23は関部が確認できる。いずれも棘状関となる。20・22～24・26・28は、太巻きの痕跡が確認できる。

鉄刀

16・17は鉄刀か。断片的な資料で、全体の形状は不明。同一個体の可能性も考えられる。16は、刀身の破片か。刃幅2.5cm、背厚0.6cm をはかる。17は茎部片か。幅1.6cm、背厚0.7cm をはかる。

刀子

18は刀子。切先の一部を欠くが、ほぼ全形を残存させる。全長9.3cm。

3 石 棺

SX01の部材として転用されていた。3点確認できたが、うち2点は接合した。石材は佐久石（砂岩）。切石で、石棺の床石であった可能性が強い。

30はほぼ正方形を呈する。図示した方向から見て縦方向が78.0cm、横方向が79.8cm で、

厚さは溝の内側が15.0cm、外側は右側が9.6cm、左側が7.6cmをはかる。図示した方向から見た側面には、溝が並行して刻まれるが、右側は幅6.6cm、内側からの深さが6.8cm。左側は幅7.4cm、内側からの深さが4.8cmとなる。溝間は48cmである。いずれの溝も貫通せず、左側は下方より32cm 9.6cmまでで収束し、右側は上方を9.6cm残す。

31もほぼ正方形を呈する。図示した方向から見て、縦方向が62.8cm、横方向が74.0cm。厚さは8.8cmをはかる。溝間は48cmである。やはり両側には溝が並行して刻まれるが、左側については、幅8.2cm、深さ3.6cmで上方は貫通。右側は上方が幅7.6cm、深さ3.4cmで、43.2cm続き、ここから幅が5.2cmと狭くなる。右側は下端と近接するが、貫通してはいない。下方は傾斜角26°で斜方向に収束する。なお、上面には『大正六年健（ママ）之』と文字が刻まれているが、『愛知県幡豆町誌（以下、幡豆町誌）』掲載された同一資料の写真には文字が確認できない。同書刊行後の追刻と考えられる。

注

(1) 土器の器種名は独立行政法人奈良文化財研究所の使用名称に依拠した。

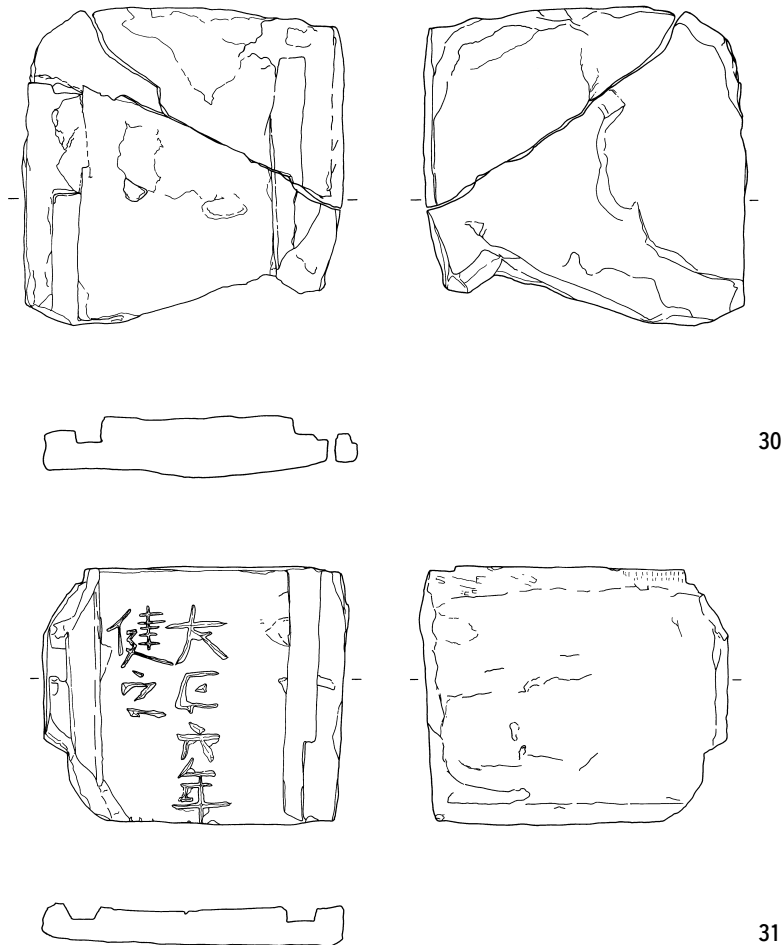


図8 石棺（1：8）

第Ⅳ章 考察

1 西川原 1 号墳関連遺物

本墳が大正年間に発掘されていることはたびたび記述している。この段階の記録類は残存していない。石棺、まぐさ石を除く出土遺物は、下図に示す須恵器フラスコ形瓶(32)が、1点のみ幡豆郡吉良町祐正寺に保管されている。この資料は、湖西産と考えられるもので、口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。法量は、口径9.0cm、器高23.1cm。形状は、ややつぶれた体部に、やや長い頸部が付く。端部は縁帯を形成する。外面の縁帯直下には痕跡的な突帯も確認できる。頸部と体部には、浅い沈線文を2本並行に施す。なお、体部には『小ノ谷助三郎地古墳出土』と、出土地点が大きく墨書されている。なお、『幡豆町誌』には、幡豆町明正寺の境内に「石器」が存在したと記すが、今回は実物を確認できなかった。境内に置かれていたことを考えると、石棺の一部であった可能性も考えられる。

33の台付長頸瓶は、幡豆町歴史民俗資料館の寄託資料で、幡豆町八幡在住の齊藤繁雄氏の所蔵品である。西川原 1 号墳から南南西方向にほぼ300mの地点付近から出土したとされている。ここに所在する西川原 2 号墳から出土したとも、その近隣に所在伝承があるとされる宝蓮寺という寺院（実体は不明）に関連する資料とも伝えられている。

2号墳遺物

この資料は、高台の一部を欠くが、ほぼ完形となる。法量は、口径11.0cm、底径9.3cm、器高25.4cmをはかる。肩部の外面には濃緑色の自然釉が付着する。体部は丸味を帯びた形状で、外反する長い頸部が付く、口縁部は丸く収めるが、端部直下の内外面には、浅い沈線文を一本施す。高台はやや歪むが、高く、外側に伸びる。

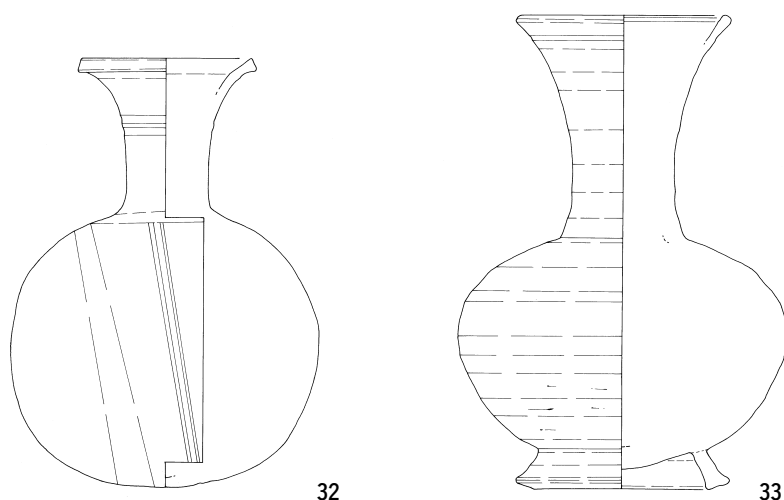


図9 伝西川原 1 号墳出土遺物実測図（1：3）

2 被葬者のイメージ

本墳は、第Ⅴ章に記すように、7世紀末の年代を考えることができる。他のほとんどの古墳と同様に、被葬者の伝承は存在しない。ここでは、調査によって得られたいくつかの特色から、本墳の被葬者像を描いてみることにする。

立地

まず周辺の古墳の分布状況を見る。小野ヶ谷地区は、本墳以外には古墳があまり知られないエリアである。終末期になって新たに古墳が造営される場所となった可能性が考えられる(森 1999)。次に本書第Ⅳ章1で紹介する台付長頸瓶は、状況から古墳の出土品であった可能性が強く、西川原2号墳との関連を予測させる。従って本墳周辺には数基で構成される古墳群が7世紀末になって登場した可能性が強い。そして、こうしたあり方は、葬地の再編成(白石 1982)に拠ったものと考えられる。

風水思想 ところで、終末期古墳の立地では、初源的な風水思想との関連が指摘されることも多い。そういう立場で本墳の立地を眺めると、まず、本墳の北側には鬼木山が所在している。東西にもそれぞれ権現山、下丸山が所在し、これらが、八幡川や、小野ヶ谷川によって、本墳の存在するお寺山と区切られている。一方、お寺山の南側には、弘法山があり、さらに南側には海岸に接して寺部の独立丘陵が存在する(図10)。

こうした地形を「四神相応」に対照させて論ずることは、現状では想像の域を越えることができない。しかし、西川原1号墳が、上記したように、古墳の空白地帯に新たに造営されたものであったこと、同時にその場所が「四神相応」の地形によく類似したものであったことは注意しておきたい。

石室・石棺の特色

類似の石室 次に、本墳の石室構造を考える。第Ⅱ章に記したように、本墳は石室の残存状況が芳しくなく、かろうじて平面形を分析対象にできるにすぎない。第Ⅱ章では、その構造について二つの案を提示した。ここで、より可能性の高い第1案とした細長胴張り形石室に注目すると、豊田市山ノ神古墳(森 2001)と規模、形状などがよく類似した構造となる⁽¹⁾。また、本墳とほぼ同時期で、距離的にも近接する洲崎山2号墳、洲崎山4号墳(愛知県教育委員会 1971)や、根ノ上古墳(加藤他 1986)、時期的にやや遡るとされる洲崎山3号墳(愛知県教育委員会 1971)とも、類似したものとなる。こうしたことから考えると、本墳石室の平面形状は、矢作川下流域に通有の形状と考えることができる。第2案とした奥窄まり形の石室としても基本的には同様であろう。そして、こうした背景には、本墳が矢作川下流域に共通の伝統性を受けて構築されたことを示しているものと考えられる。

次に古墳の内容物に着眼する。まず、石棺であるが、本墳の例は佐久石製の切石を石材としている。従来より三河湾の周辺地域では、組み合わせ式の箱式石棺の存在が注目され

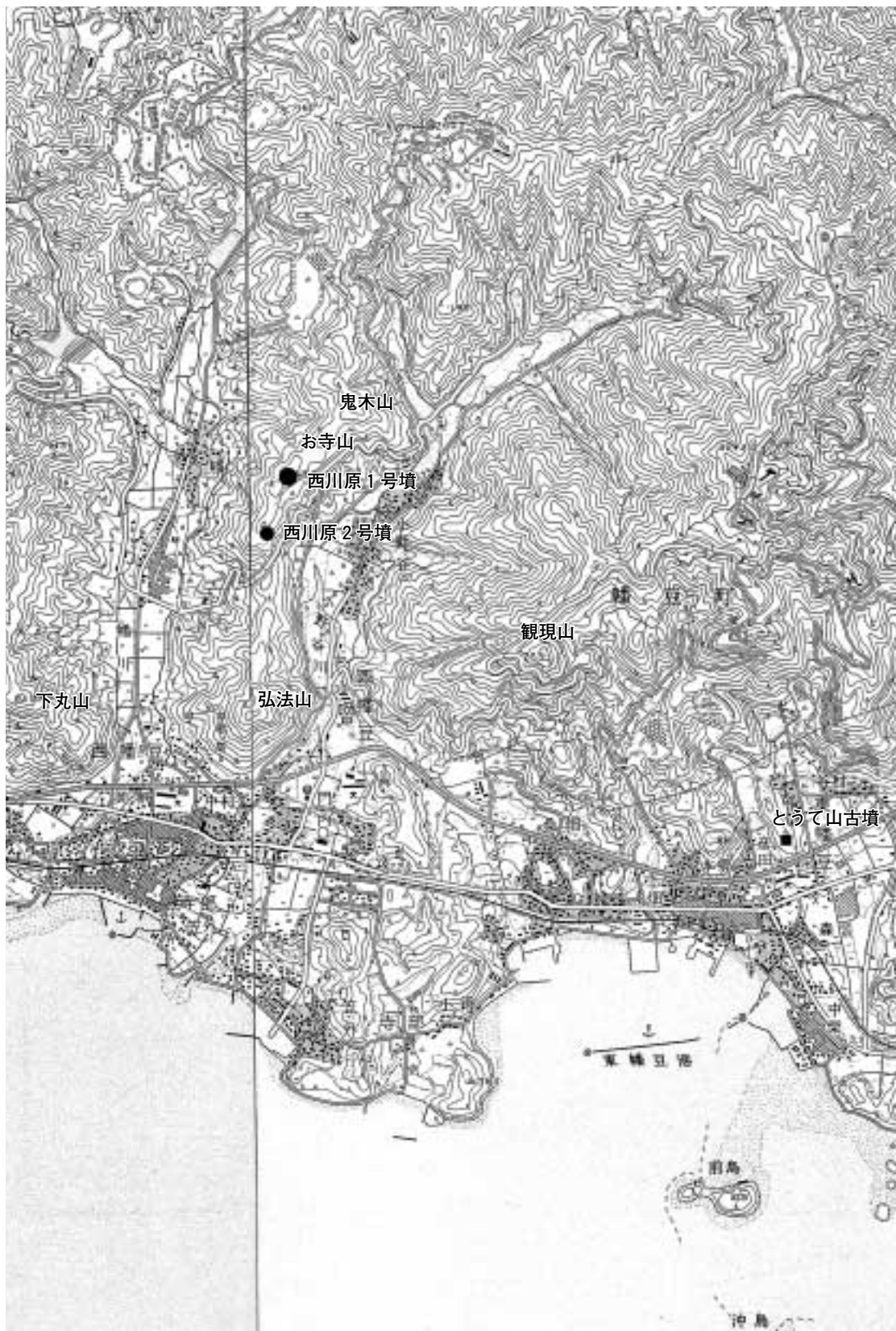


図10 西川原1号墳位置図（1：25,000）

この地図は国土地理院地形図1：25,000「吉田」「蒲郡」を使用したものである。
地名は福田啓志郎氏の教示による

ている。しかし、これらはほとんどが板状の石材をラフに組み合わせたもので、本墳のような切石の石材を使用する石棺は、本墳から直線距離で南西2.8km 地点に所在するとうてい山古墳に知られるのみである。

遺物の特色

次に遺物の特色に注目する。まず、注目されるのは、帯金具だろう。第Ⅲ章で報告したように、本墳では鉸具と鉤尾が2点ずつ出土しており、これらを着装した帯が少なくとも二本は存在したことが確認できる。また、鉤尾では幅が25mm、12mm と幅の違いが確認できたのに対し、二点の鉸具は、ほぼ同一の規格となる。帯留めに打たれた鉤の幅は13mm をはかり、帯の幅が同一ではなく先細りの形状でない限り、13とした鉤尾はこれらの鉸具には使用できない。従って、本墳には帯が三本以上は存在していた可能性を考えておくことができる。また、土器類では、畿内産（系）土師器が4個体出土していることも注意したい。いずれも、律令制と密接な関係にあることは言うまでもない。上記した帯金具と同一の性格を考えることができる。所有者の政治的、社会的地位を外的に示すアイテムとして使用されたと考えられる。

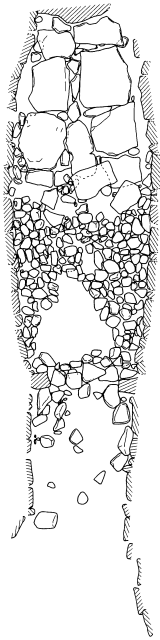
被葬者の素描

次に、上記の情報から本墳の被葬者が持つ性格をまとめる。

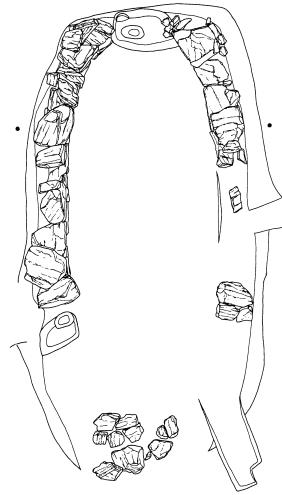
第1の性格 まず、本墳の石室構造が西三河地区の伝統的様相が強いことを評価すれば、被葬者は幡豆周辺に勢力を持つ地域豪族を考えることができる。一般的に、7世紀代の古墳は、前段階に比較してその数量が著しく減少していることが特徴である。古墳を造営した、あるいはできた階層が、限定された結果であると考えられている。小野ヶ谷地区を舞台とする葬地の再編成もこうした動きと連動するのだろうか。もしそうであるのなら、本墳の被葬者は、葬地を再編することが可能な、地域豪族の中でもやや優位に立った存在と考えることができる。これを第1の性格とする。

第2の性格 次に、もう少し空間的に視野を広げて考える。幡豆地区は、海岸部まで山塊が迫り、可耕地が乏しいエリアと言える。しかし、後期古墳が約50基程知られている。この中には、中ノ郷古墳、とうてい山古墳など注目される著名な古墳もいくつか知られており、伝統的に有力な勢力が存在したことが考えられる。

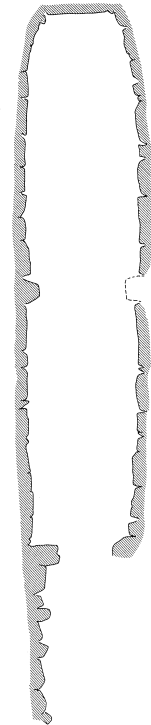
こうした、周辺部に可耕地が乏しいエリアに立地する後期古墳を探してみると、まず、三河湾の島嶼部には、佐久島（46基）や、日間賀島（35基）、篠島（3基）と多数の古墳が存在している。また、渥美半島の先端部に位置する渥美町藤原古墳群（17基）も海岸に面し、これらと同様の性格を考えることができる⁽²⁾。いずれも三河湾の中央部分を望む位置関係となる。次に、これらを有機的な関係として認識するには、まず、いくつかの古墳で、組み合わせ式の箱式石棺が報告されていることが注目できる。また、特に佐久島産の砂岩（佐久石）に顕著であるが、石室などに用いる石材を海を介して運ぶ事例も確認できる。



山ノ神古墳



西川原 1 号墳



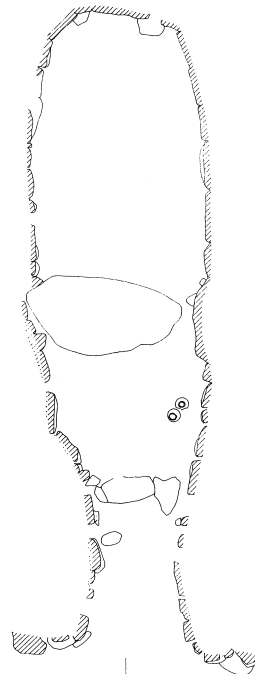
五釜 1 号墳



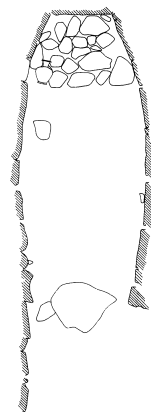
松ノ上古墳



洲崎山 2 号墳



洲崎山 3 号墳



洲崎山 1 号墳

図11 石室の比較 (1 : 80)

森崇史氏は、こうした状況に着眼し、これらの古墳が6世紀後半から7世紀頃にかけて、三河湾に経済基盤を求めた集団（＝「海人」）と関わることを指摘している（森 1997、同 1998）(3)。本墳資料は、床石が残存しているのみで、これを箱式石棺と限定はできない。しかし、佐久石製の石材とこれに施された切石加工を考慮して、石棺中でも優位性を認めることができる。現状では、佐久石を切石加工した石棺は、幡豆町のとうてい山古墳に一例知られるのみである。こうした事を考えると、本墳の被葬者には、海人集団群の中でも優位に立つ存在が考えられるであろう。これを、第2の性格とする。

第3の性格 次に、副葬品に着眼する。本墳出土資料のうち、帯金具や畿内産（系）土師器はいずれも中央より下賜品と考えられる。これらは、律令制の地域政策に従って意図的に配布されたものであろう。このため、被葬者には中央政権との関わりが濃厚な職掌を想像できる。また、前述したように、本墳の立地状況が風水思想と関連づけられるのであれば、その造営には、相当の教養に裏打ちされていたことも考えることができる。

ここで本墳の年代を考慮すると、こうした条件を満たす被葬者には、成立直後の幡豆評に関わる存在が最も近い位置にあると考えられる。再び、帯金具や畿内産（系）土師器の性格を評価すれば、これの所持者には、律令制上での相応の身分を考えなくてはならないだろう。

以上の理由から考えると、本墳の被葬者には、幡豆評の評督、あるいはそれにきわめて近い位置にいた人物を想定できよう(4)。これを第3の性格とする。ここで、第3の性格を持つ人物が、同様に、第1と第2の性格を持っていたことを考えると、評督もしくはそれに近い役職が成立してくる過程が推定できよう。同時に、古墳を媒体とした伝統的な身分秩序が律令体制により再編成される過渡的な様相も表現していると考えられる(5)。

注

- (1) 石室構造については、荒井信貴氏、伊藤久美子氏、三田敦司氏、松井直樹氏（五十音順）らに、ご教示をいただいている。
- (2) 位置関係は口絵裏の地図に小さいドットで表現している。なお、佐久島と日間賀島については古墳の集中域を示す。
- (3) 第Ⅰ章に記したように、本墳から幡豆山塊を挟んだ北側には、羽角山古墳群（約90基）が知られている。報告書が刊行されており、その内容が比較的明らかになっているが、石棺の使用は報告されていない（松井 1999）。山塊を境界とした両者の差は、葬送観念の違いと考えられる。しかし、石室の平面形状に着眼すると、羽角山古墳群中の五釜1号墳（松井 1999）には、むしろ類似性が考えられる。一方、石棺を使用する古墳が存在するエリア内も、一元的ではない。北村和宏氏は、これらの石棺を分析し、「構造・配置等には少なからず小異が認められ、その点について今後検討の必要がある（北村 1989）」と言った意見を提示している。また、石室の平面形状に着眼すると、石棺を使用するエリア内相互の類似性はむしろ薄い。このため、石棺のみに着眼して、これらを一括して理解することには若干の問題もある。ここでは、森氏の指摘する「海人」を、しばしば石棺を使用するという葬制上の類似が認められる集団群と理解したい。
- (4) これを契機として、三河湾の海人集団群の一部もしくは大半が、そのまま律令的なシステムに組み込まれたのであろう。
- (5) 付編に述べられているように下賜品と判断される帯金具が青銅製ではなく、合金工程を省いた銅製であることには、注意を払っておきたい。

第V章 まとめ

本墳は大正年間の発掘調査によって出土した佐久石製の石棺によって、比較的知られた存在であった。しかし、遺構は損壊が著しく進み、墳丘は失われ、石室は側壁が最下段から二段程度のみ残存するにすぎない。一部では基底部の石材すら、失われている状況であった。

今回の調査で得られた須恵器類は、猿投産と考えられる高坏と、湖西産の可能性が強い杯Gと前述したフラスコ形瓶がある。前者は斉藤編年で岩崎17号窯式(斉藤 1995)、尾野編年でⅣ期中段階(尾野 2000)に、実年代は、前者が斉藤編年で7世紀後半、尾野編年で675～685年頃となる。次に、畿内産(系)土師器は、林部 均氏の教示によれば、形態や手法上の特色から、飛鳥Ⅳに比定できる特色を持っているという。なお、本センターから本書と同時に刊行された『八王子遺跡』(第92集)では、近隣の畿内産(系)土師器を集めて胎土分析を実施しているが、関連資料として、本墳資料のうち2点を分析対象とした結果、そのデータが掲載されているが、いずれも畿内で使用されたものと近似した分析結果が出されている。なお、飛鳥Ⅳの実年代は、680～690年頃とされている(林部 1999)。以上の様に、今回得られた土器類の年代観を比較すると、ほぼ一線上となり、年代のぶれは生じない。

年代観

次に、本墳の石棺は床石に側石をはめ込む形状を取る。溝の内側に側石が設置されるため、棺の内側幅は48cmとなる。これは成人一人がようやく納まる幅である。このことは、本墳の石棺が、一部で報告されている改葬を前提とした棺(骨蔵器)ではないことを考えさせる⁽¹⁾。被葬者を伸展葬とするには残存する2点では長さが足らず、床石がもう一点必要となる。これを残存している2点と同サイズと考え、小口にも床石と同様の厚みを持つ石材が使用されたのであれば、埋葬時の石棺は、全長約210cm、幅約70cm程度となる。本墳にこれを納めると、石室には余剰空間があまり存在しない。

石棺構造案

本墳は、出土している土器類に時期幅があまり存在しないことや、推定される石棺の規模を石室のそれと比較すると、追葬があった可能性は薄い。終末期に通有の単葬墓墳と考えることができる。矢作川流域において、最終末に築造された古墳の一つと言えよう。

注

- (1) 本墳の石棺を改葬後の骨蔵器と考えるのは、古墳という墓制に改葬という葬制が加わる契機として、火葬の登場を考えたいからである。なお、火葬骨を改葬する事例は8世紀前半頃が上限(森本 1999)とされ、本墳はこれより若干遡る状況にある。

参考・引用文献

- 赤塚次郎 1992 「海部郡と三河湾の考古学」『伊勢と熊野の海』海と列島の文化 8 小学館
- 磯部幸男 1988 「日間賀島の古墳に見られる三つのタイプ」『知多古文化研究』4 知多古文化研究会
- 岩原 剛 2001 「副葬品の変質」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会
- 黄 永融 1999 『風水都市』学芸出版
- 大橋正明他 1996 『吉良町史』原始・古代 中世前期 吉良町史編さん委員会
- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 東海土器研究会
- 加藤安信他 1986 『根ノ上古墳・講伏古墳』幡豆町教育委員会
- 加納俊介 1988 「石室の形状」『西三河の横穴式石室』資料編 愛知大学日本史専攻会考古学部会
- 北村和宏 1989 『下山古墳』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 斉藤孝正他 1995 『須恵器集成図録』第三巻 東日本Ⅰ 雄山閣
- 坂 靖 1991 「帯」『古墳時代の研究』8 雄山閣
- 三田敦司 2001 「三河における後期古墳の動向」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 須川勝以 1988 「東三河の横穴式石室について」『三河考古』創刊号
- 杉崎章他 1977 『日間賀島の古墳』南知多町文化財調査報告書第二集 南知多町教育委員会
- 杉崎章他 1988 『日間賀島の古墳』南知多町文化財調査報告書第三集 南知多町教育委員会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8
- 鈴木一有 1999 「遠江における後期古墳の副葬品にみる階層性」『三河の後期古墳を考える』Ⅱ 三河古墳研究会
- 2001 「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会
- 鈴木路治 1988 「石室の規模」『西三河の横穴式石室』資料編 愛知大学日本史専攻会考古学部会
- 竹内 睦 2000 「西川原古墳」『年報』平成11年度 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県埋蔵文化財センター
- 2001 「西川原古墳」『愛知県埋蔵文化財情報』16 平成11年度 愛知県教育委員会
- 服部伊久男 1988 「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集』第九 橿原考古学研究所
- 土生田純之 1988 「西三河の横穴式石室」『古文化談叢』第20集（上）九州古文化研究会
- 1991 「西三河の横穴式石室」『日本横穴式石室の系譜』学生社
- 林部 均 1999 「飛鳥浄御原その後」『考古学研究』第45巻4号
- 樋上 昇 2001 「畿内産（系）土師器」『まいぶん愛知』No.64 愛知県埋蔵文化財センター
- 久永春男他 1988 『藤原古墳群』渥美町教育委員会
- 藤沢康隆 2001 「古墳時代中期から後期における金工製品の展開」『東海の後期古墳を考える』

第8回東海考古学フォーラム三河大会

町田 章	1970	「帯金具」『考古学雑誌』56-1
松井直樹	1999	『羽角山古墳群』愛知県西尾市教育委員会
	2000	「西三河・尾張の様相」『古墳の終末』三河古墳研究会
松岡 史	1992	「九州の風水地理と遺跡」『季刊自然と文化』1992春季号 観光資源保護財団
森 崇史	1997	「三河湾島嶼部における古墳について」『伊勢湾考古』11 知多古文化研究会
森 崇史	1998	「三河湾島嶼部」『三河の後期古墳を考える』I 三河古墳研究会
森 泰通	1999	「西三河の終末期古墳小考」『三河考古』第12号
森本 徹	1999	「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」『古代文化』11 財団法人古代学協会
山下勝年	1993a	「篠島の歴史的位置」『知多古文化研究』7 知多古文化研究会
山下勝年	1993b	「藤原宮・平城宮・平城京出土の三河湾三島関係の木簡」『知多古文化研究』7 知多古文化研究会
愛知県教育委員会	1971	『県立児童総合遊園内埋蔵文化財調査報告』
幡豆町誌編纂委員会	1958	『愛知県幡豆町誌』
一色町誌編纂委員会	1967	『佐久島の古墳』一色町誌資料第1輯

付 編

愛知県西川原 1 号墳から出土した帯金具の自然科学的研究

東京文化財研究所保存科学部

平尾良光

鈴木浩子

1 はじめに

愛知県埋蔵文化財センターより愛知県幡豆郡幡豆町西川原 1 号墳から出土した帯金具に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。そこで蛍光 X 線分析法により化学組成を、鉛同位体比法により遺物の材料となった鉛について産地推定を行った。

2 資 料

資料は愛知県幡豆郡幡豆町西川原 1 号墳から出土した帯金具 8 点である。表土除去中に出土したもので、もともとは石室内に位置したものと考えられている。古墳は共伴土器から 7 世紀終末と考えられているという。

表 1 に資料名と鉛同位体比値を記した。表 1 中の No. は西川原 1 号墳報告書内の番号と一致する。また、資料の写真を図版 5 に示した。

3 分析法

3-1 蛍光 X 線分析法

1) 測定方法および装置

測定に使用した装置はセイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型微小部蛍光 X 線分析装置 SEA5230E である。この装置は直径 0.2mm の一次 X 線ビームを資料に入射することができるため、微小領域の化学組成の測定に有効である。今回の測定で採用した測定条件は次の通りである。

X 線管球 : モリブデン (Mo)

管電圧・管電流 : 45kV・20 μ A

コリメータ : ϕ 1.8mm

測定時間 : 200秒

測定雰囲気 : 大気中

2) 結果と考察

2 資料の帯金具について、蛍光X線分析法により化学組成を測定した。得られたスペクトル図を図1～2に示した。図1がNo.8、図2がNo.9の帯金具である。今回は錆の上から測定しているので定量計算は行っていない。スペクトル図から、帯金具は2点とも銅 (Cu) が多く、スズ (Sn)・鉛 (Pb) ともほとんど見えない。金属面を測定していないので確かなことはいえないが、純銅である可能性が高いと思われる。

3-2 鉛同位体比法

1) 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した*1)。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5～20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器 (質量分析計) の感度が非常に良いため、1 マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錆を微量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用した。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した*2)。

2) 鉛同位体比の測定

蛍光X線分析法により、これらの資料は鉛を含まない純銅である可能性が高いことがわかったので、広範囲に錆を採取しそれを鉛同位体比測定用の試料とした。錆試料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2マイクログラムの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

3) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表1で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した (図3)。

横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした*3～7)。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛と推定される。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域で、日本

産鉛の範囲とした。Dは多鈕細文鏡が分布する領域の中央線として示され、朝鮮半島産の鉛と推定される。またaは弥生時代後期の銅鐸が集中した領域である。

横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中でA'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

4) 結果と考察

西川原1号墳から出土した帯金具は、図3のA式図においてC・D領域に位置した。B式図においても同様である。No.8と13、およびNo.11と12はA・B式図でほぼ一致した値を示した。このことは同一材料である可能性が高い。その他はそれぞれ異なった材料と判断される。

図3から、帯金具の鉛同位体比值には規則性が見い出せず、ばらついた感じさえある。今回測定された8点の帯金具は、ほぼ純銅製品で鉛量がかかなり少なく、このため測定誤差が通常よりも大きい試料もあった(表1中、*印で示した)。また測定には表面に発生した錆を用いたため、岩石あるいは資料相互の汚染も可能性としては考えられ、それがばらつきに影響しているのかとも思われた。しかし図3で示されるばらつきは、No.10が大きくかけ離れているなど、誤差範囲以上に大きく広がっているもので、汚染の可能性などよりは材料自身の違いを示していると見ていいだろう。このことから、帯金具8点は同一材料で作られているわけではないと考えられる。

材料の産地に関しては、判断が少し難しい。A・B式図に利用されている領域は、弥生時代の青銅製品を測定した事で得られた領域である。7世紀になれば新しい鉛山が開発され、異なった鉛同位体比を示す材料が見つかる可能性がある。そこで、これまでに測定されている朝鮮半島の鉛鉛山の分布*6)を図4に示した。これらの図から、朝鮮半島の鉛鉛山が分布している領域に関してその特徴を次のようにまとめることができる。

- (1)朝鮮半島北部・中央部の鉛鉛山はA式図で右上方向に集中する。
- (2)朝鮮半島中南部の鉛鉛山は左下でD線よりもさらに下側となる(一部の既存報告書では、D₂領域と表現)。
- (3)朝鮮半島中南部の鉛鉛山は日本の鉛鉛山領域と重なる部分がでてくる。
また、一部は中国華南地域の鉛鉛山領域とも重なる。
- (4)朝鮮半島南部の鉛鉛山はD線よりも上側に位置した。しかし測定数が少ないので確証はない。

これらの特徴は少ない鉛鉛山資料の分布から判断しているので、今後、朝鮮半島における鉛鉛山資料の同位体比測定が進み、古代における利用との関係がはっきりしてくれば、この概念は変更されるであろう。

しかし現段階において、朝鮮半島の鉛鉛山が示す鉛同位体比分布と帯金具を比較すると、幾つかの資料はC領域に含まれ日本産の材料である可能性を捨て切れないが、朝鮮半島中南部の鉛鉛山と分布領域が類似しているようである。

これら資料は一括して出土しており、相互に関係のある可能性が高い。8点の帯金具が関連して作られたものと考え、その材料は朝鮮半島産の純銅が使われた可能性が示唆される。

これら資料は7世紀末の古墳から出土したと推定されている。中央政府との関係で朝鮮半島産の可能性を持つ材料で作られた帯金具がどのような意味を持つのか、今後考古学的にも明らかにされることが期待される。

4 引用文献

- (1)平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学 4 考古学と年代測定学・地球科学，松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編，314－349，同成社（1999）
- (2)平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について；保存科学 28，17－24（1989）
- (3)馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370，4－10（1982）
- (4)馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌 68，42－62（1982）
- (5)馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM No.382，16－26（1983）
- (6)馬淵久夫，平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－；考古学雑誌 73，199－210（1987）
- (7)平尾良光編：「古代青銅の流通と鑄造」 鶴山堂（1999）

表1 愛知県西川原1号墳から出土した帯金具の鉛同位体比

No.	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
8	鉸 具	18.537	15.660	38.998	0.8448	2.1038	* HS1068
9	鉸 具	18.627	15.680	39.169	0.8418	2.1028	HS1070
10	鏹 板	18.162	15.616	38.720	0.8598	2.1319	HS1069
11	鏹 板	18.516	15.646	38.815	0.8450	2.0963	* HS1063
12	鉞 尾	18.484	15.626	38.737	0.8454	2.0957	HS1066
13	鉞 尾	18.543	15.658	38.992	0.8444	2.1028	HS1064
14	環状銅製品	18.500	15.668	38.883	0.8469	2.1018	* HS1067
15	環状銅製品	18.388	15.648	38.720	0.8510	2.1057	HS1065
誤差範囲		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

*鉛量が少ないため誤差が大きい

[測定条件]

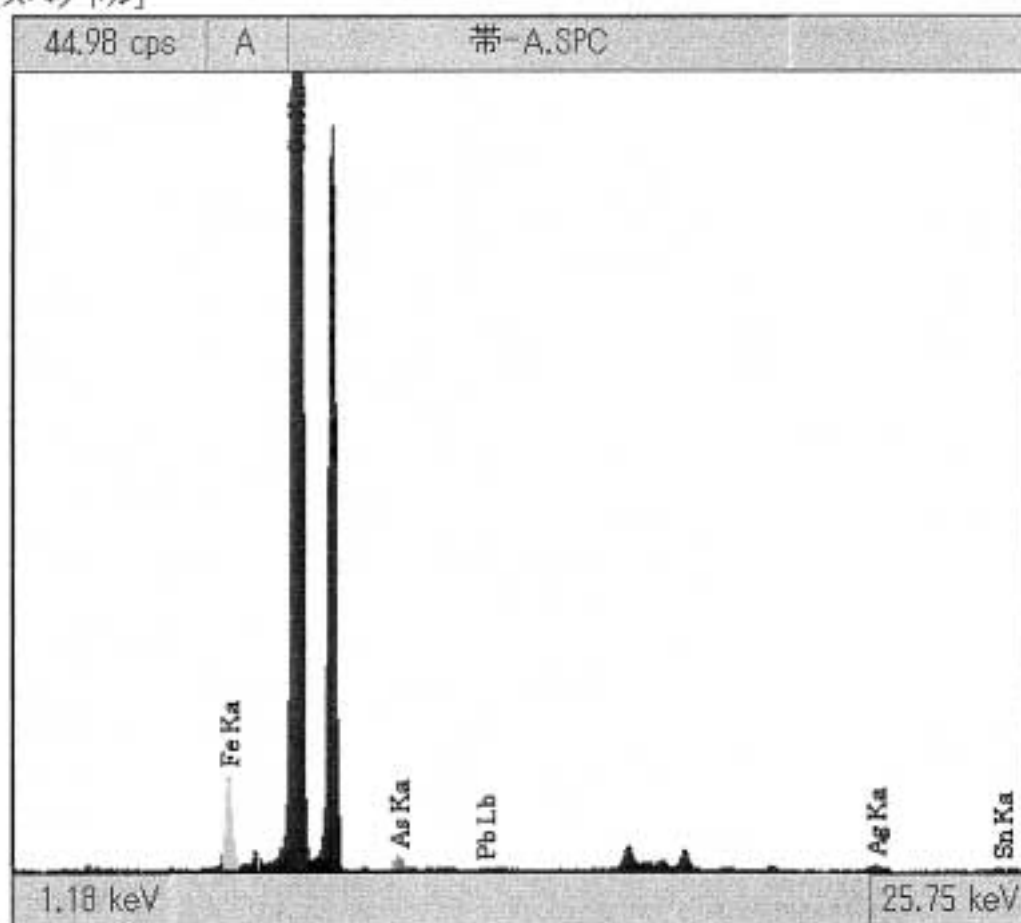
測定装置	SEAS230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	147
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	20
コメント	帯-A 西川原1号墳 帯金具8

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

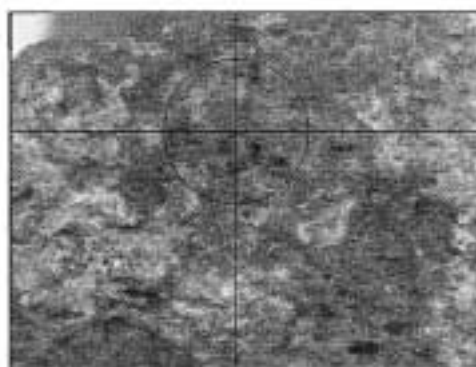
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	48.860	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	2424.549	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K α	8.920	10.33-10.73
50	Sn	スズ	K α	1.875	24.92-25.47
47	Ag	銀	K α	4.230	21.84-22.36
82	Pb	鉛	L β	2.273	12.42-12.84

図1 西川原1号墳から出土した帯金具の蛍光X線スペクトル

〔測定条件〕

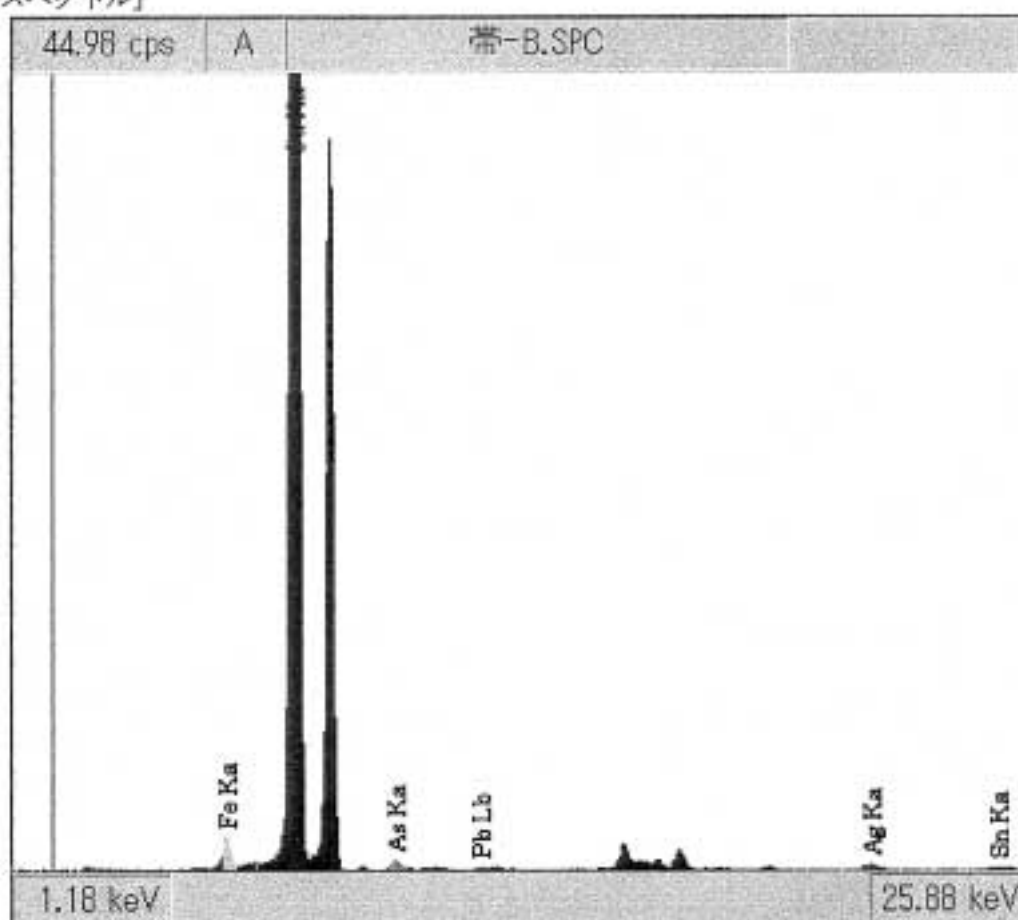
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	147
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	20
コメント	帯-B 西川原 1号墳 帯金具 9

〔試料像〕



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

〔スペクトル〕



〔結果〕

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	19.537	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	2426.296	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K α	6.613	10.33-10.73
50	Sn	スズ	K α	2.025	24.92-25.47
47	Ag	銀	K α	4.930	21.84-22.36
82	Pb	鉛	L β	2.301	12.42-12.84

図2 西川原1号墳から出土した帯金具の蛍光X線スペクトル

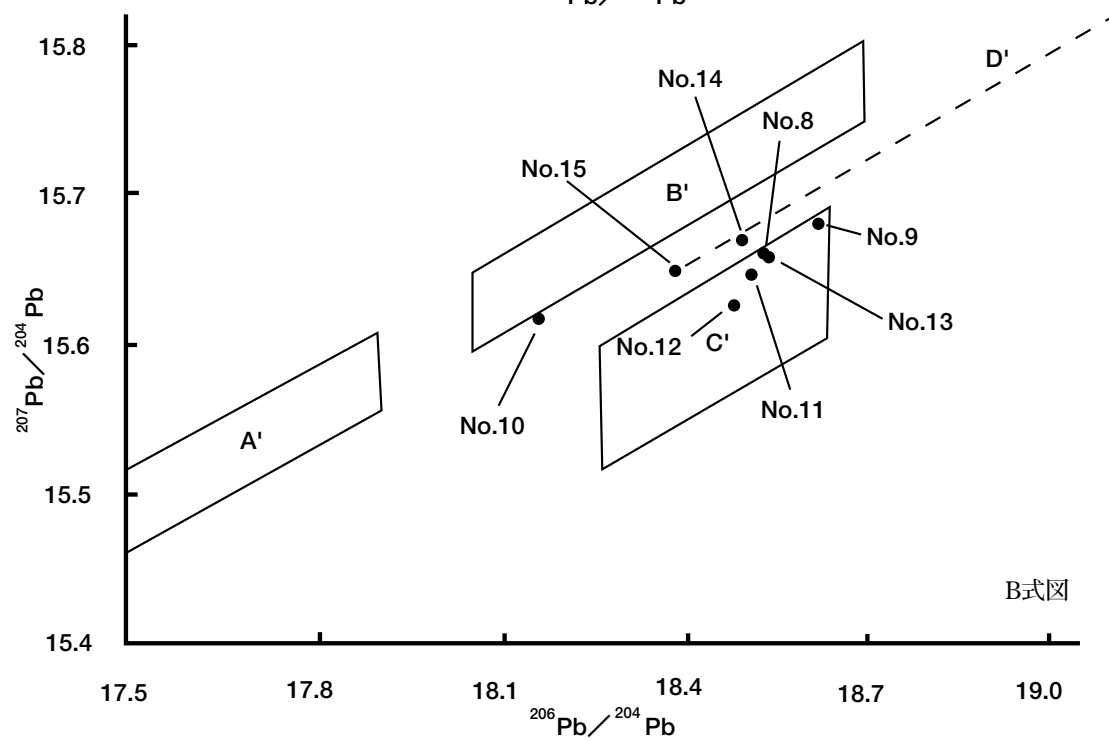
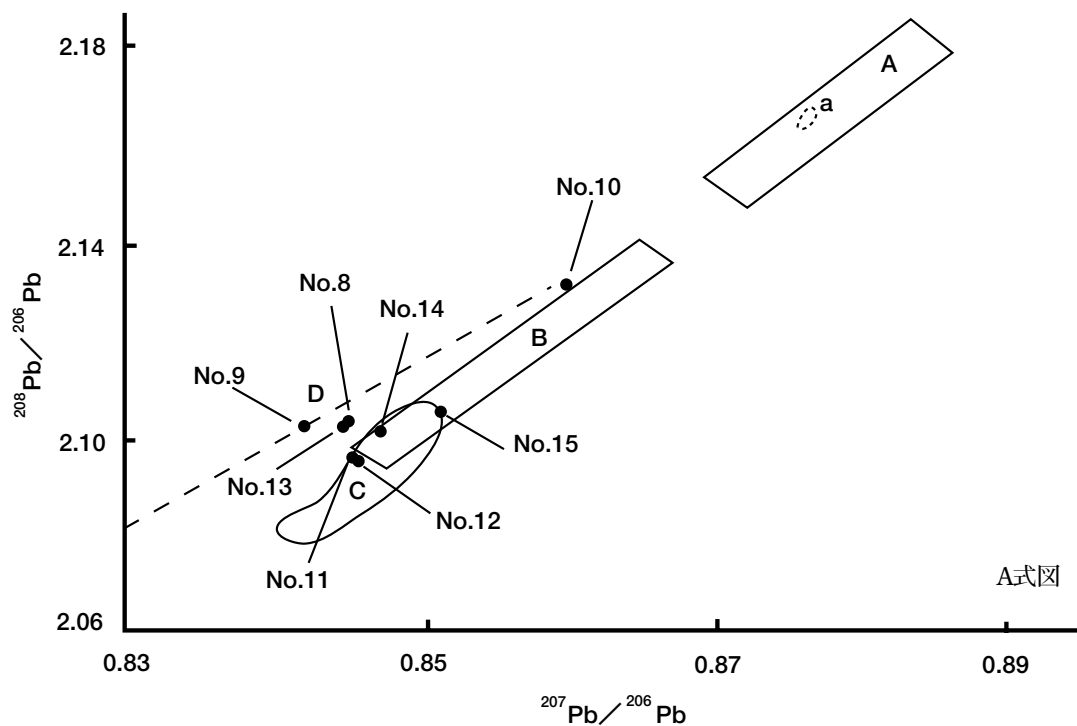


図3 西川原1号墳から出土した帯金具の鉛同位体比

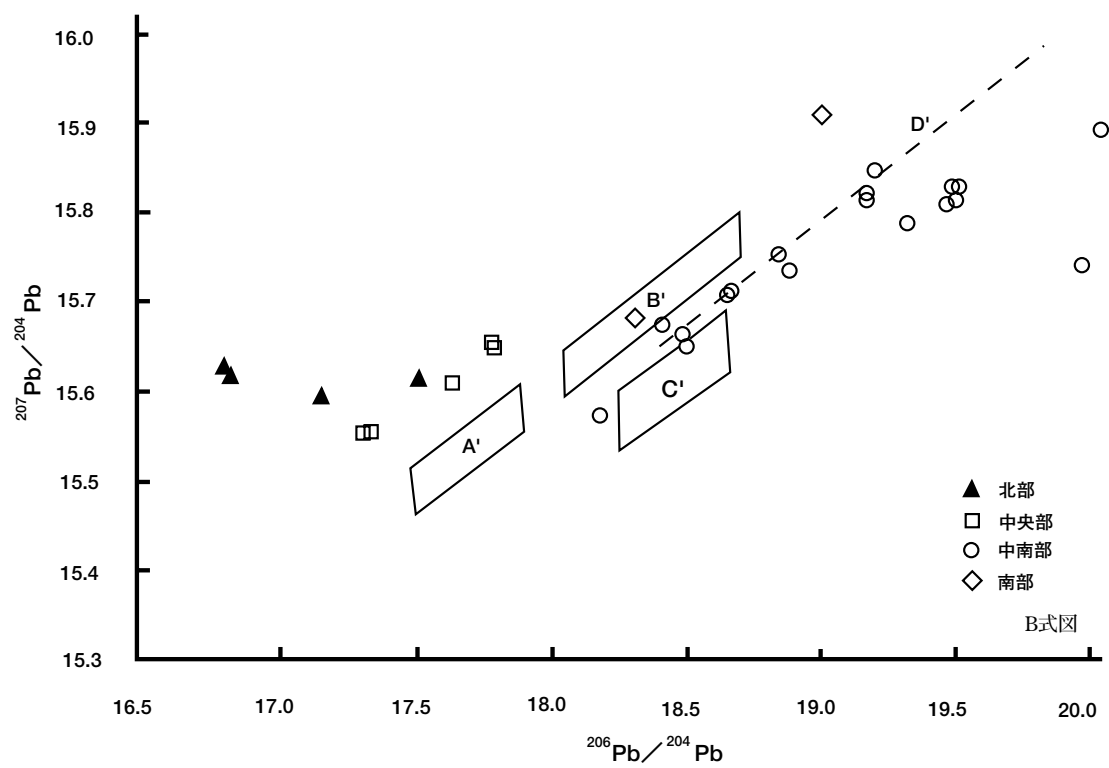
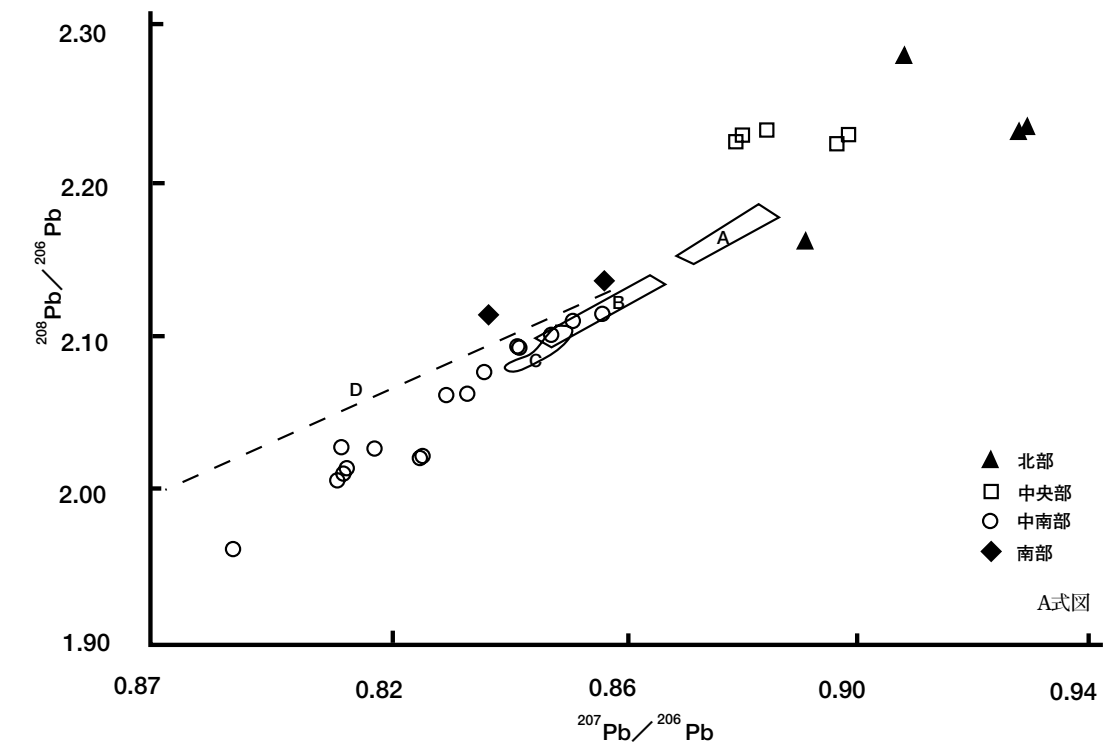


図4 朝鮮半島産鉛鋅石の鉛同位体比

遺構計測一覧

横穴式石室

単位 m

全 長		最大幅		奥壁幅		前庭部長	備 考
5.1		1.77		0.76		0.8	
		全長	玄室長	羨道	玄門幅	備 考	
案 1	単室構造	4.3	3.06	1.2	1.63		
案 2	無袖型	4.3	*	*	*		

遺物計測一覧

単位 cm

図版番号	登録番号	種類	器種	口径	底径	器高	色調	備考
1	E 1	須恵器	杯G 蓋	9.8	*	*	明オリーブ灰色	
2	E 2	須恵器	杯G 身	9.1	*	*	灰黄色	
3	E 3	須恵器	高坏	13.6	10.7	*	灰白色	
4	E 4	土師器	杯蓋	14.4	*	*	明赤褐色	
5	E 5	土師器	杯B 蓋	17.2	*	3.9	橙色	
6	E 6	土師器	杯A	16.8	9.1	4.9	橙色	
7	E 7	土師器	杯C	12.4	*	*	橙色	

単位 g

図版番号	登録番号	種類	器種	重量	備 考
8	M 1	銅製品	帯金具	7.9	
9	M 2	銅製品	帯金具	4.9	
10	M 3	銅製品	帯金具	3.2	
11	M 4	銅製品	帯金具	2.2	
12	M 5	銅製品	帯金具	2.6	
13	M 6	銅製品	帯金具	1.6	
14	M 7	銅製品	帯金具	5.5	
15	M 8	銅製品	帯金具	4.6	
16	M 9	鉄製品	鉄刀	34.0	
17	M10	鉄製品	鉄刀	22.0	
18	M11	鉄製品	刀子	10.1	
19	M12	鉄製品	鉄鏃	3.2	
20	M13	鉄製品	鉄鏃	2.2	
21	M14	鉄製品	鉄鏃	3.9	
22	M15	鉄製品	鉄鏃	3.3	
23	M16	鉄製品	鉄鏃	1.1	
24	M17	鉄製品	鉄鏃	0.9	
25	M18	鉄製品	鉄鏃	2.3	
26	M19	鉄製品	鉄鏃	3.6	
27	M20	鉄製品	鉄鏃	0.5	
28	M21	鉄製品	鉄鏃	1.5	
29	M22	鉄製品	不明	12.9	

図版



石室から海を望む

图版1 石室



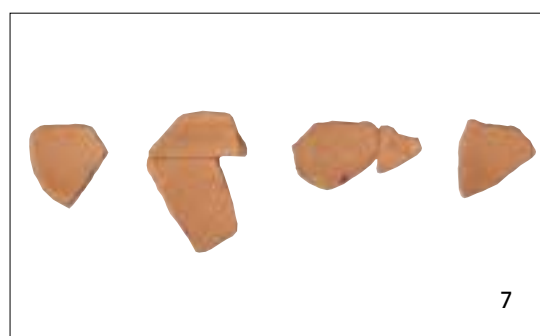
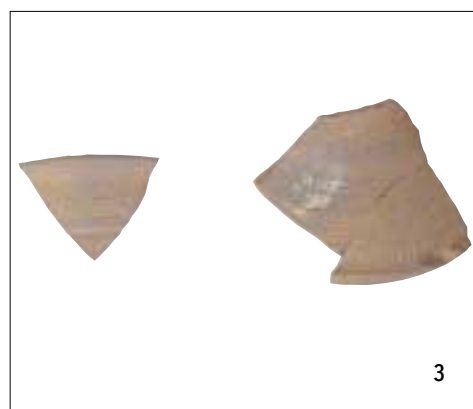
图版 2 奥壁



図版3 奥壁(上), 側壁(中・下)



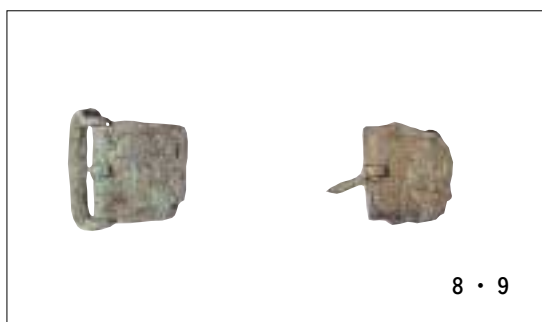
图版 4 土器



図版5 金属製品



10・11



8・9



12・13



14・15



16



18

報告書抄録

ふ り が な	にしがわらこふん							
書 名	西川原古墳							
副 書 名								
シ リ ー ズ 名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第106集							
編 著 者 名	池本正明・竹内 睦・平尾良光・鈴木浩子							
編 集 機 関	(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802- 2 TEL0567-67-4163							
発 行 年 月 日	西暦 2002年 8 月31日							
収 蔵 遺 跡 名	所 在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
		市町村	遺跡番号					
にしがわらこふん 西川原古墳	あいちけんはづぐん 愛知県幡豆郡 はづちようおおあざにし 幡豆町大字西 はづにしがわら 幡豆西川原	23483	60018	34 度 48 分 15 秒	137 度 07 分 35 秒	1999 10～12	500㎡	内陸用地造成
収 蔵 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
にしがわらこふん 西川原古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室		須恵器・土師器 金属製品		畿内産(系)土師器4個体 純銅製帯金具	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第106集

西川原古墳

2002年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 サンメッセ株式会社